○クシマザクラ（外山三郎・木村陽二郎）

肥前大村の縣社大村神社には珍らしいサクラの品種「オホムラザクラ」のある事は既に本誌第十七卷七號 418—422 頁に紹介したが，此度はこれとは異る一品種クシマザクラを紹介したい。これは大村神社の參道に凡そ 10 本あり樹令は凡そ 20 年位，大きなものは根回り 60 cm，高サ 3 m ほどで更に生長する見込である。このサクラもオホムラザクラ同樣，二段咲の花をつけるのであるが，二段咲の花は凡そ半數ばかりであり，又外花の萼片は必ず5個であつてオホムラザクラの凡そ10個なのとは異るし，外花の雌芯は多くは2個，ときに1個で葉化して內花の萼となり，その中に少數の花瓣あり小數のものは更にこの中に雄芯雌芯を含んで完全な二段咲となるものである。麒麟とも揖斐の二度櫻とも異るからこれに大村神社の所在地大村市の玖島崎の玖島城趾にちなみクシマザクラの名をこゝにて與へ，學名を *Prunus Lannesiana* Wilson forma *kusimana* Y. Kimura et Toyama とする。このサクラの性質を次に述べる。

葉は始めベニエビチャ乃至ベニカバイロで次第にうすれて綠色となる。充分生長した葉は葉片長さ 8—14 cm，巾 5—6.5 cm，葉柄の長さ 2.5—3 cm，蜜腺2個時に3個，葉緣にはやゝ大きい單鋸歯又は二重鋸歯あり，鋸歯は先端著しく尖る。葉質はオホムラザクラより薄いように思はれる。花序は凡そ8割は2花をつけ時に3花，極めてまれに一花で四花以上のものはない。花軸の長さ 1—1.5 cm，花梗の長さ 4 cm，苞は長さ 1—2.2 cm で單一又は三裂する。

花に色々の變化ある事は任意の 50 花をとつてしらべた表を見られたい。二段咲になるものでは初め外花が開く。この花の雌芯は綠色葉化した顯著なもので，二枚のときは相對しその中を細見すれば中に內花の潛むをしる。漸次にして內花も開くが花のしをれるのは外花，內花ほゞ同時でしおれると同時に花は花梗の中ほどよりちぎれて落ちる。花は徑 4.5 cm 內外，萼筒は短い方で 4 mm，巾 6 mm，萼片の中程には 2—3 個まれにそれ以上の微鋸歯があり，萼は若いときはエビチャ色 (Pale Burnt Lake)，花の開くにつれ淡くなる。外花の花瓣は蕾のときはウスヒ (Eugenia Red) で開くにつれて次第にニクイロ (Corinthian Pink) になり落花前には更にうすい。花瓣 36—56 枚凡そ 45 枚，大きなもので徑2 cm で殆ど圓形に近く先端に欠刻がある。外花の雄芯は 0—11 本凡そ5本，葯が多少瓣化して白色微細の瓣狀物がついている事が多く花粉は見當らない。

內花の萼片卽ち外花の雌芯は通常2個（50 花中 12 花は 1 個）で長さ 1.3 mm，巾は廣いところで 4—6 mm，綠色葉化し微鋸歯があり先端は多少赤味をおび角狀に尖る。下方では相對する二葉は抱き合ひ內花の完全なものでは更に 5 mm 位の短梗をもつて花の中央にあるが，內花の不完全なものではこの內花の花梗としてみられるものは認められない。蕾のときにはこの二葉が花外につき出ている。內花の花瓣は多いもので 13 枚，淡紅のものもあり純白のものもある。長さ 2—12 mm で變化著しい。內花の雄芯は花糸短くときに葯のみのものもある。內花の雌芯は白色糸狀のものから綠色葉狀のも

のまでいろいろの變化がある。

Prunus Lannesiana Wilson f. **kusimana** Y. Kimura et Toyama. f. nov.

Arbor, ramis robustis. Folia glaberrima oblongo-ovata vel oblongo-obovata apice caudato-acuminata basi rotundata vel leviter truncata 8—14 cm longa 5—6.5 cm lata, petiolis 1—1.5 cm longis glandulis nectariferibus 2 vel 3. Pedunculus 1—1.5 cm longus, floribus saepius 2, rarius 3 rarissime 1, pedicellis 4 cm longis, bracteis 1—2.2 cm longis, simplicibus vel trilobatis. Flores ca. 4.5 cm diametientes saepius prolifici, inodori. Flores primarii (marginales, externi), sepalis semper 5, petalis ca. 45 (36—56), suborbicularibus ad 2 cm longis, apice emarginatis et undulatis, staminibus ca. 5 (0—11), antheris

	外花			内花				計
	萼片	花瓣	雄芯	萼片	花瓣	雄芯	雌	
(1)	5	40	2	2				49
(2)	〃	42	5	2				54
(3)	〃	42	3	2				52
(4)	〃	40	8	1				54
(5)	〃	44	8	1				58
6	〃	53	1	2	13	1	1	76
(7)	〃	43	9	1				58
8	〃	45	8	2	2			62
9	〃	39	3	2	1			50
10	〃	47	4	2	1			59
11	〃	44	2	2	6	1	1	61
12	〃	4[illegible]	5	2	2			57
13	〃	43	3	2	1			54
14	〃	38	4	2	1			50
(15)	〃	40	3	2				50
(16)	〃	39	5	1				50
17	〃	36	2	2	2	5	1	53
18	〃	56	1	2	6	2	1	73
(19)	〃	40	5	2				52
20	〃	55	0	2	2	1	1	66
21	〃	55	0	2	2			64
22	〃	53	3	2	1			64
23	〃	49	1	2	8	2	1	68
24	〃	56	1	2	3			67
(25)	5	44	11	1				61
26	〃	41	7	2	1			56
(27)	〃	45	4	2				56

	外花			内花				計
	萼片	花弁	雄芯	萼片	花弁	雄芯	雌芯	
28	5	44	3	2	6	2	1	63
29	〃	44	5	2	7			63
30	〃	49	0	2	8	1	0	65
(31)	〃	39	7	1				52
(32)	〃	41	8	2				56
(33)	〃	43	7	1				56
34	〃	43	4	2	1			55
(35)	〃	46	3	1				55
36	〃	47	3	2	2			59
(37)	〃	43	6	1				55
(38)	〃	45	7	1				58
(39)	〃	37	10	1				53
40	〃	47	2	1	1			56
41	〃	44	0	2	3	0	1	55
(42)	〃	41	7	2				55
43	〃	44	1	2	5	2	1	60
(44)	〃	42	5	2				54
45	〃	42	4	2	1			54
46	〃	44	5	2	3	0	1	60
(47)	〃	41	6	2				54
(48)	〃	38	8	2				53
49	5	39	7	2	2			55
50	〃	48	0	2	2	0	1	58
計	250	2203	216	88	93	17	11	2878
平均	5	44	4					57

外花の雌芯は内花の萼片にあたる。
左の番號は任意の 50 花,（ ）は内花のないもの (22 花)。
ゴチックのものは内花完全なもの（8 花)。

plus minus petaloides sterilibus. Carpella floris primarii sunt sepala floris secundalii, foliacea, 2 rarius 1, 13 mm longa 4—6 mm lata, serratula apice plus minus rubescentes anthennaeformes, extra alabastrum projecta basi stipitata, stipibus 5 mm longis. Flores secundalii, petalis ad 13 (1—13), leviter roseis vel albis, 2—12 mm longis, staminibus 1 vel 2 rarius ad 5, filamentibus brevibus saepe 0, pistillis filiformibus albis, vel foliaceis et viridis.

Nom. Jap. Kusima-zakura (nov.) Hab. Kyûsyû. Prov. Hizen, Ômura Kusima, in horto templi culta (S. Toyama 18 Apr. 1947—Typus in Herb. Univ. Tokyo).

○キイレツチトリモチの長崎における再發見（外山三郎）

キイレツチトリモチ *Balanophora tobiracola* Makino は明治 43 年，薩摩產の材料によつて記載されたものであることは周知の事實であるが，田代善太郎，山崎又雄兩氏はその前，明治 40 年 12 月 1 日長崎市飽浦の雜木林內でこれを發見された。その標本の一部は今私の手もとにもある。田代氏がかつて私に語られたところによればその產地は，長崎港の西側にある飽浦の海岸から峠をこして福田に通ずる細い舊道の北側，峠の附近で，しかも峠の東側即ち長崎港に面しシヤリンバイのしげつたところであつたという。しかるにこの舊道はその後改さくされてバスをも通すほどのものとなつたが，この道路工事の際發生地がけずりとられたため，この兩氏以外に同地でこの植物を採集したものはなく，全く絕滅したものと思はれていた。ところが高橋貞夫君は昭和 16 年 11 月 3 日，長崎港の北東にある本河內の雜木林內で主としてトベラ，稀にネズミモチ，極めて稀にシヤリンバイに寄生している本種を發見され，こえて昭和 18 年 12 月 29 日，今度は田代，山崎兩氏によつて發見されていた飽浦で再發見された，その場所は特にこゝでは詳言しないが，ともかく兩氏初發見の所から極めて近い地點である。先年私も高橋君の先導でこの兩地に現物をみることができた。ついで昭和 20 年 10 月 24 日，今度は高橋君の敎子である長崎中學生の中谷保行，杉本隆介，藤野充の三君が長崎港の南東にある愛宕山でトベラに寄生している本種を發見，更に昭和 21 年 11 月 12 日，高橋君は長崎港の東にある彥山でネズミモチに寄生している本種を發見された。即ち田代，山崎兩氏發見後凡そ 40 年，本種の分布北限である長崎港をかこむあちこちの山々でつぎつぎに發見されたことは愉快なことである。しかし最近燃料不足のためこれらの雜木林はいつ伐採されるかわからぬ運命にあるのは心細いしだいで，今のうちに何とかしておきたいものと思う。

○マルバママコナが壹岐にある（外山三郎）

マルバママコナ *Melampyrum ovalifolium* Nakai は中井博士が朝鮮元山に產するものを原品として記載されたものであるが，まだ內地に產する記錄をみない。ところがこれが長崎縣の壹岐にある，壹岐の島では勝本，箱崎，那賀など島の北半の樹陰や路傍